

[研究論文]

ボランティア活動参加と動機の付与2

- 草津市で実施したアンケート調査のデータ分析から3 -

塚本 利幸¹⁾・舟木 紳介¹⁾・橋本 直子²⁾・永井 裕子¹⁾

1. はじめに

少子高齢社会の本格化、格差の拡大と固定化、災害の頻発や大型化などへの対応として、自助、公助に加えて互助が注目されている。ボランティア・市民活動（NPOなど）の取り組みは互助の一つであり、その代表的な形態である。ボランティア・市民活動の活性化に向けた施策や取り組みに関して、1）ボランティア活動に関する研修会、講演会、催しなどを開催し、具体的な活動の内容や方法、やりがいや楽しさ、社会的な意義などを紹介し、意識啓発を通して、参加意欲の向上を目指す内的な動機付けに照準したモチベーション・アプローチ（内側からの動機付け）と、2）活動への参加になんらかの対価を付与するといった形で、外的な誘因によって参加を引きだそうとするインセンティブ・アプローチ（外からの動機付け）、に大別することができる。

本稿では、ボランティア活動の活性化のための施策や取り組みに関して、1）研修会、講演会、催しなどへの参加経験、2）ボランティア活動に対価が払われることへの評価と、ボランティア活動への参加経験、今後の参加の意向などとの関係に焦点をあてて、福井県立大学ボランティア研究会が実施したボランティア活動に関するアンケート調査のデータの分析を進めていく。

2. アンケート調査の概要と研究方法

滋賀県はボランティア活動が盛んで、「平成28年社会生活基本調査」によれば、滋賀県の行動者率は33.9%で、全国平均の26.0%を大幅に上回り、全国第1位となっている（図1）。

福井県立大学ボランティア研究会では、ボランティア活動参加の実態を明らかにする目的で、20歳から80歳までの草津市在住の一般住民から無作為抽出¹⁾した2000人を対象に「ボランティア・市民活動（NPOなど）に関するアンケート」を郵送法で、2019年3月に実施した²⁾。有効回収数は491件（回収率24.6%）であった。回答者の基本属性（性別と年代）は表1の通りである。

受付日 2023.05.15

受理日 2023.07.07

所属 1) 福井県立大学・看護福祉学部、2) 関西学院大学・人間福祉学部

上記の調査データを、統計的な手法（クロス集計とカイ2乗検定、残差分析など）を用いて、分析する。

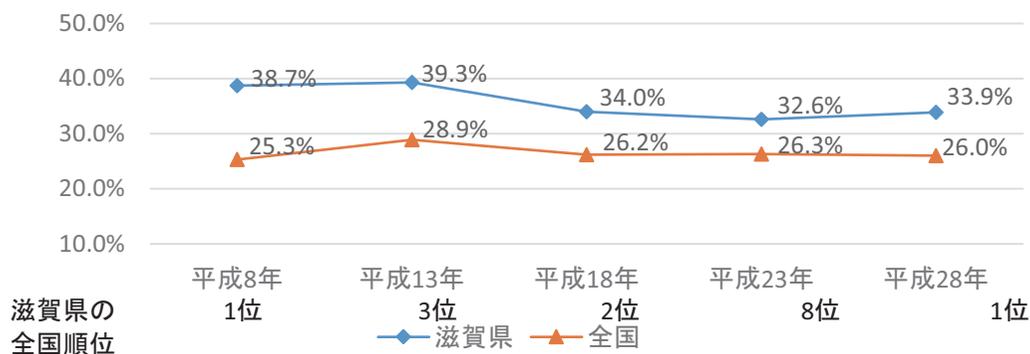


図1 ボランティア活動の行動者率の推移（「社会生活基本調査」より作成）

表1 回答者の基本属性

項目	カテゴリー	%
性別 (n=481)	男性	39.3
	女性	60.3
	答えたくない	0.4
年齢 (n=478)	20歳代	6.7
	30歳代	11.9
	40歳代	17.8
	50歳代	16.7
	60歳代	22.4
	70歳以上	24.5

3. 倫理的配慮

アンケート調査の実施にあたっては、調査票の冒頭部分で、調査の趣旨と内容を説明し、協力を求め、調査票の返送は対象者の自由意思に委ねた。調査票は無記名であり、個人の特定は原理的に不可能であるが、データの入力、管理にあたってはコード化をおこない、個人を特定できないよう厳重な管理をおこなった。分析および分析結果の公表に際しては、全体として集計し、統計的手法（クロス集計とカイ2乗検定、残差分析など）を用いた処理をおこない、個人の回答内容が特定されることのない手法を採用する。

5. 草津市の地域特性－福井市との比較から－

草津市の地域特性について、福井市と比較する形で簡単に説明しておきたい。草津市は滋賀県の南部に位置し、平成27年の国勢調査のデータによると人口は137,247人で、滋賀県の人口

のほぼ10分の1にあたる。面積は67.82km²である。福井市の人口が264,360人、面積が536.21km²なので、福井市の8分の1程度の面積に2分の1以上の人口が暮らしていることになる。通勤の利便性などの要因により京都、大阪のベッドタウンとして人口流入が続いている。

草津市、福井市への居住経路を比較したものが図2である。「生まれてからずっと同じ市町に住んでいる」、「県外からのUターン」、「県内からの転入」の比率が、福井市では1%水準で有意に高く、「県外からの転入」の比率が、草津市では1%水準で有意に高い。福井市では市域をまたいでの移動を経験したことの無いものが4割程度に達するのに対して、草津市では県外からの転入者が5割を超える。定住性の高い福井市と人口流入の激しい草津市のコントラストが明瞭に表れる結果となっている。

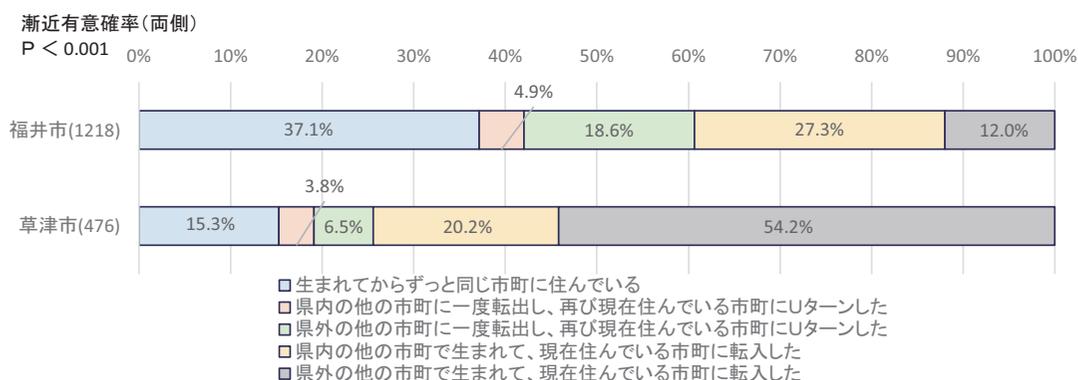


図2 福井市・草津市への居住経路

塚本・舟木・橋本・永井（2023a）では、福井市のデータを用いて同様の分析をおこなっている。地域特性の異なる福井市との分析結果の異同については、まとめの部分で検討する³⁾。

4. 研修会、講演会、催しなどへの参加経験とボランティア活動参加の関係

1) 研修会、講演会、催しなどへの参加経験

今回の調査では、ボランティア活動に関する研修会、講演会、催しなどへの参加経験の有無（以下では、「研修会などへの参加経験」と表記）について尋ねている。回答結果をまとめたものが図3で、回答者の39.2%がそうした経験を有している。

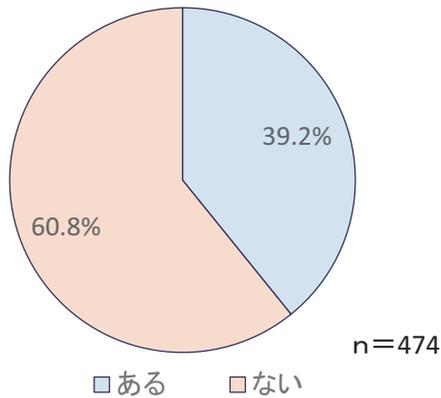


図3 研修会・講演会・催し等への参加経験

性別との関係、年代との関係をまとめたものが図3、図4である⁴⁾。性別によって参加経験に違いがみられないのに対して、年代に関しては「40歳代」で参加経験のあるものの比率が低く（1%水準で有意）、「70歳以上」で高い（1%水準で有意）。グラフの形状からは、40歳代以下で参加経験のあるものの比率が低い傾向が確認される。後述するように、研修会などへの参加の経緯に関して、「地域で参加」と回答したものの比率が突出して高い。年代による参加率の違いは、地域との結びつきの濃淡（若年層で薄く、シニア層で濃い）を反映したものであると推察される。

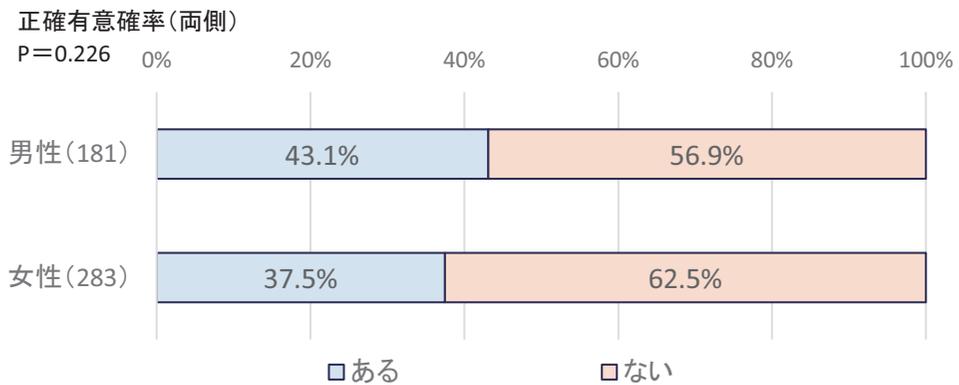


図4 性別×研修会などの参加経験

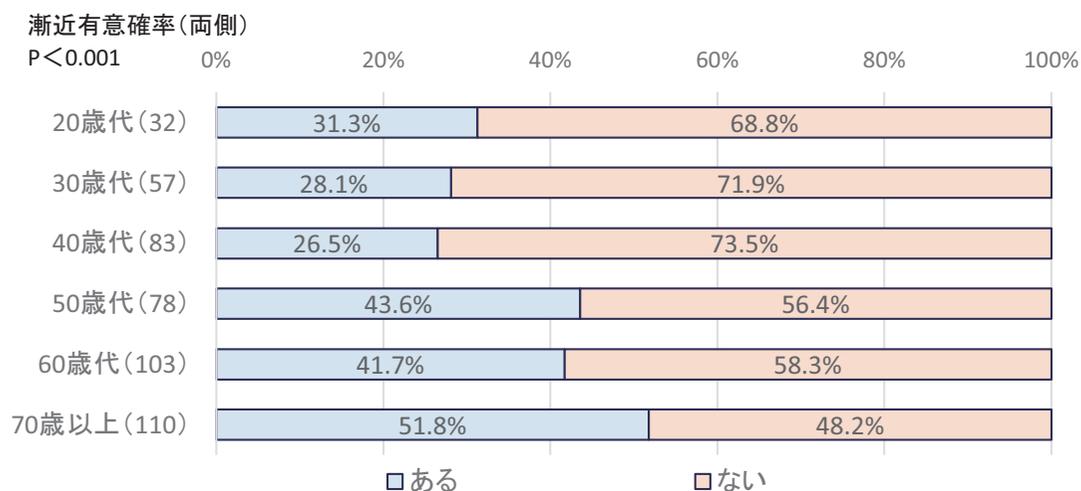


図5 年代×研修会などへの参加経験

2) ボランティア活動への参加経験との関係

「研修会などへの参加経験」との関係进行分析する前に、ボランティア活動への参加状況に関して、全般的な傾向を確認しておきたい。参加経験についてみると、回答者の35.9%が過去1年間に参加経験があり、それ以前に参加経験のあるものが23.6%、参加経験のないものが40.5%となっている(図6)。福井市の集計結果と大きな違いはみられない。今回の調査では過去1年間の活動参加の有無について11の分野ごとに尋ねており、参加した活動の種類を算出することができる。それをまとめたものが図7である。また、過去1年間に活動した回数についても尋ねており、それをまとめたものが図8である。種類に関しては「1種類」のものが4割程度で最も多く、これに「2種類」の3割程度が続く。回数に関しては「年に2～3回」が36.0%で最も多く、以下順に、「月に1回以上」の34.9%、「年に4回以上」の18.4%、「年1回」の10.9%が続く。福井市に比べて、「月に1回以上」、「年に4回以上」といった参加頻度の高いものの比率が高い。

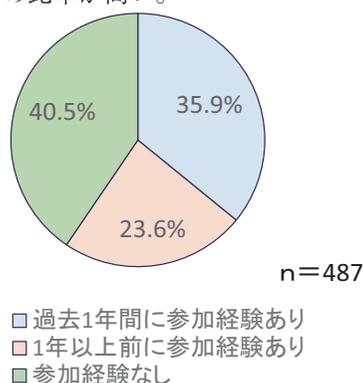


図6 ボランティア活動への参加経験

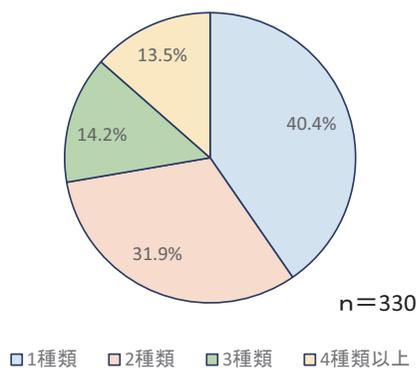


図7 参加した活動の種類

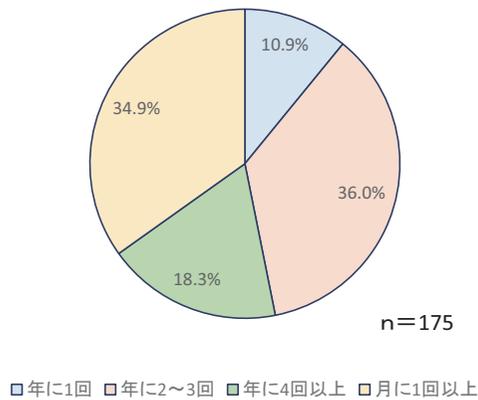


図8 活動の回数

「研修会などへの参加経験」と「ボランティア活動への参加経験」の関係を確認したものが図9である。

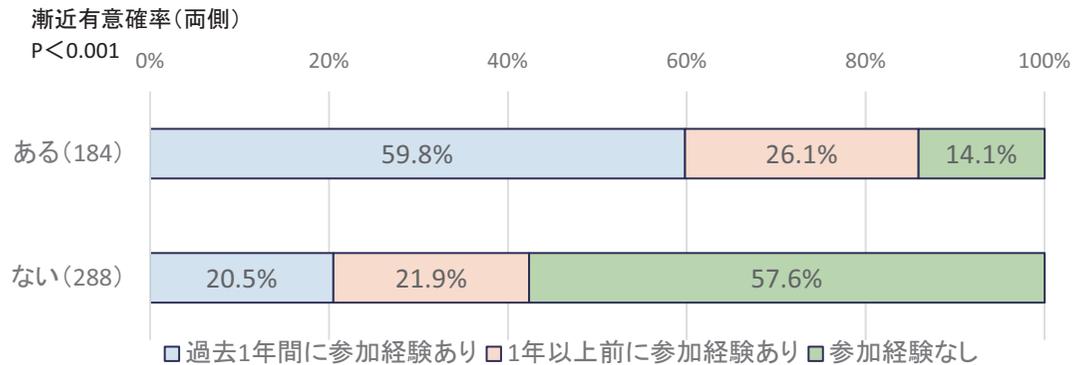


図9 研修会などの参加経験×ボランティア活動の参加経験

過去1年間にボランティア活動へ参加経験のあるものは、研修会などへの参加経験があるもので59.8%なのに対して、研修会などへの参加経験がないものでは20.5%と3倍近くの違いがあり、1%水準で有意差がある。逆に、ボランティア経験の参加経験がないものは、研修会などへの参加経験があるもので14.1%なのに対して、研修会などへの参加経験がないものでは57.6%に達し5倍近くの違いがあり、やはり1%水準で有意差がある。

過去1年間にボランティア活動への参加経験のあるものについて、「研修会などへの参加経験」と「参加した活動の種類」の関係を確認したものが図10である。

ボランティア活動参加と動機の付与2

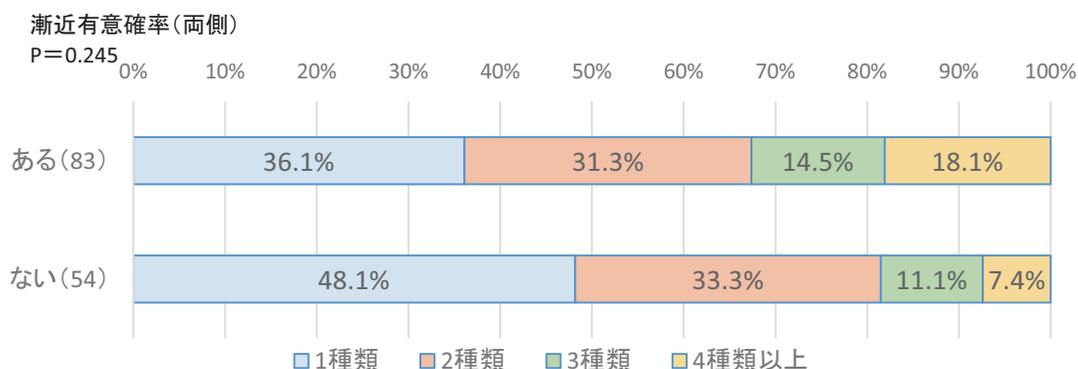


図 10 研修会などの参加経験×過去1年間の参加活動の種類

サンプル数が少ないこともあり、有意な結びつきは確認できない。

過去1年間にボランティア活動への参加経験のあるものについて、「研修会などへの参加経験」と「参加した活動の回数」の関係を確認したものが図11である。

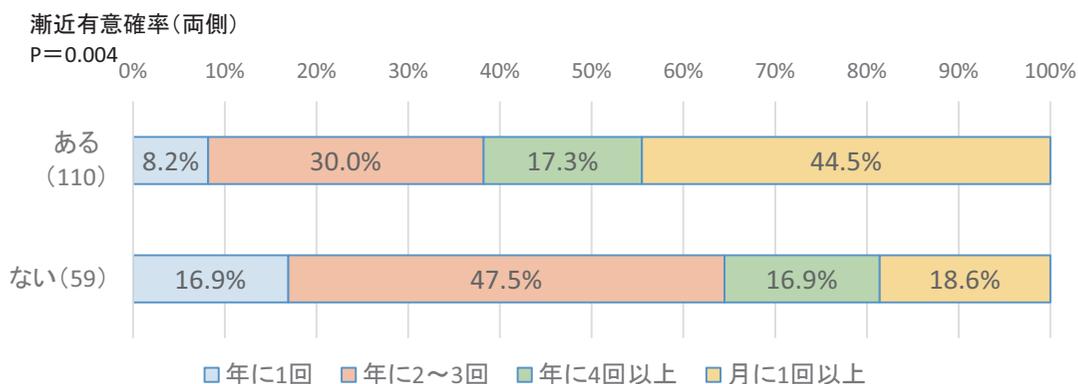


図 11 研修会などの参加経験×過去1年間の活動の回数

過去1年間に「年に2～3回」の頻度で活動に参加したものの比率は、研修会などへの参加経験があるもので30.0%なのに対して、ないものでは47.5%と、ないもので1.5倍近く高い（1%水準で有意）。逆に、「月に1回以上」の頻度で活動に参加したものの比率は、研修会などへの参加経験があるもので44.5%、ないもので18.6%と、あるもので2倍以上高い（1%水準で有意）。

研修会などへの参加経験があるものは、参加経験がないものに比べて、ボランティア活動への参加経験が豊富で、活動の頻度も高い、という傾向が確認される。

1) 研修会などへの参加によって、ボランティア活動への参加が促進されるといった影響関係を想定することも可能であるが、2) ボランティア活動参加へのモチベーションの高いものほど、研修会などへの参加意欲も旺盛であるといった影響関係も想定可能である。3) 双方向

の影響関係がスパイラル的に働いている可能性、4) 他の要素を媒介とした疑似相関である可能性、なども払拭できない。縦断調査などを通して影響関係を把握することを、今後の研究課題としたい。

3) ボランティア活動への今後の参加の意向との関係

「研修会などへの参加経験」との関係进行分析の前に、ボランティア活動への今後の参加の意向に関して、全般的な傾向を確認しておきたい。回答者の70.3%が今後、ボランティア活動に参加してみたいと考えており、29.7%が参加したくないと考えている(図12)。今回のアンケート調査では、今後のボランティア活動への参加の意向を有するものに、11の分野から参加したいと思うものをすべて選んで回答してもらっている。参加したいと考えている活動の種類を算出してまとめたものが図13である。参加したい回数についても尋ねており、その結果をまとめたものが図14である。

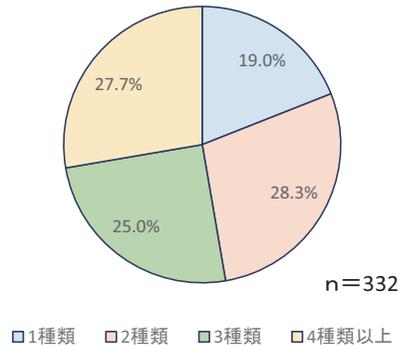
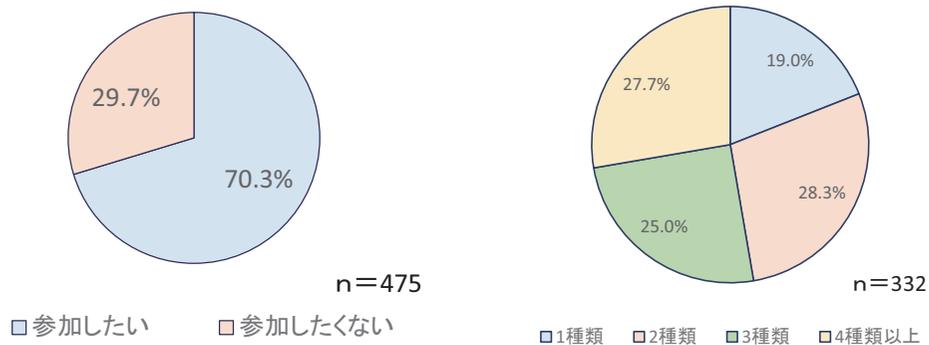


図 12 ボランティア活動への参加の意向

図 13 参加したい活動の種類

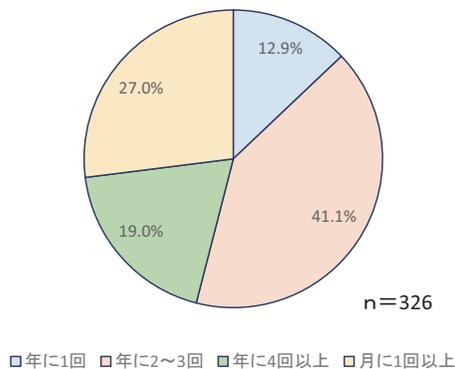


図 14 参加したい活動の回数

参加したい活動の種類に関しては、「2種類」のものが一番多く28.3%を占める。以下は僅差であるが、「4種類以上」(27.7%)、「3種類」(25.0%)、「1種類」(19.0%)の順に比率が高い。過去1年間に実際に参加した分野の種類に関しては、「1種類」が4割程度、「2種類」が3割程度で、「3種類」、「4種類」は15%以下となっている。回数に関しては、「年に2~3回」という回答が最も多く4割程度、「月に1回以上」が3割程度、「年に4回以上」が2割程度で、「年に1回」が最も少なく12.9%となっている。過去1年間に実際に参加した活動の種類(図7)、活動の回数(図8)と比較すると、種類に関してはズレが大きく、回数に関しては小さいというコントラストが確認できる。参加したことのない分野で新たに活動を始めるよりも慣れていない分野で参加の回数を増やす方が、ハードルが低いのかもしれない。

「研修会などへの参加経験」と「今後のボランティア活動への参加の意向」の関係を確認したものが図15である。

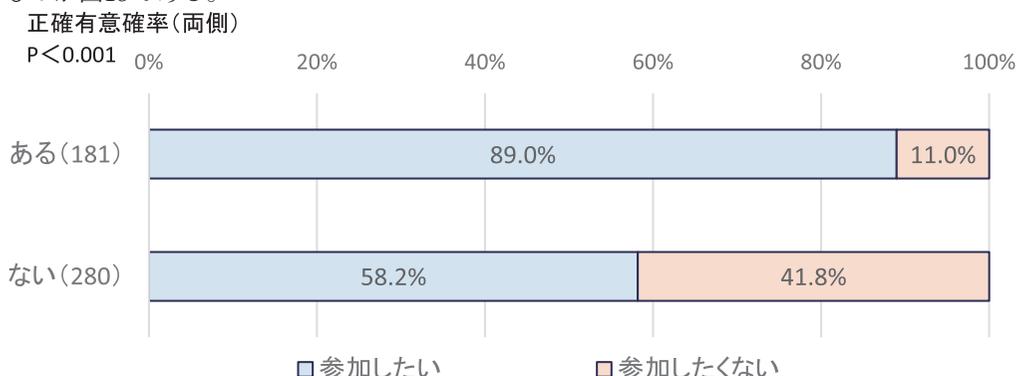


図15 研修会などの参加経験×今後の参加の意向

今後にボランティア活動へ参加の意向を有するものの比率は、研修会などへの参加経験があるもので89.0%なのに対して、研修会などへの参加経験がないものでは58.2%と1.5倍程度の違いがあり、参加経験のあるもので高く、1%水準で有意差がある。

今後、ボランティア活動に参加したいと考えているものについて、「研修会などへの参加経験」と「参加したい活動の種類」の関係を確認したものが図16である。

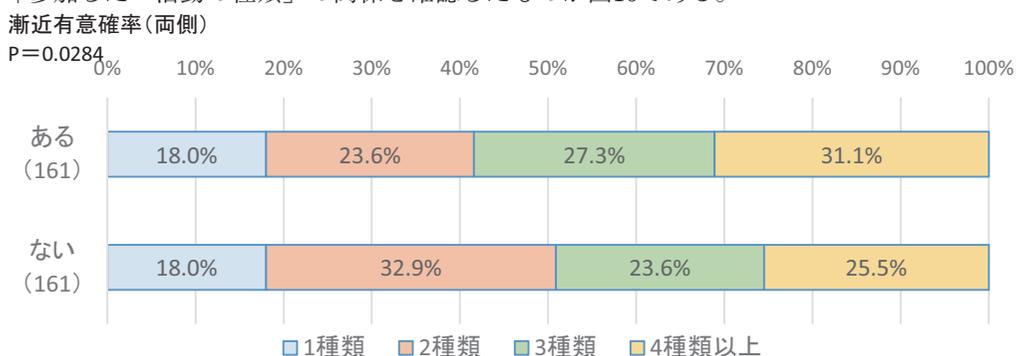


図16 研修会などの参加経験×今後に参加したい参加活動の種類

有意な結びつきは確認されない。

今後、ボランティア活動に参加したいと考えているものについて、「研修会などへの参加経験」と「参加したい活動の回数」の関係を確認したものが図17である。

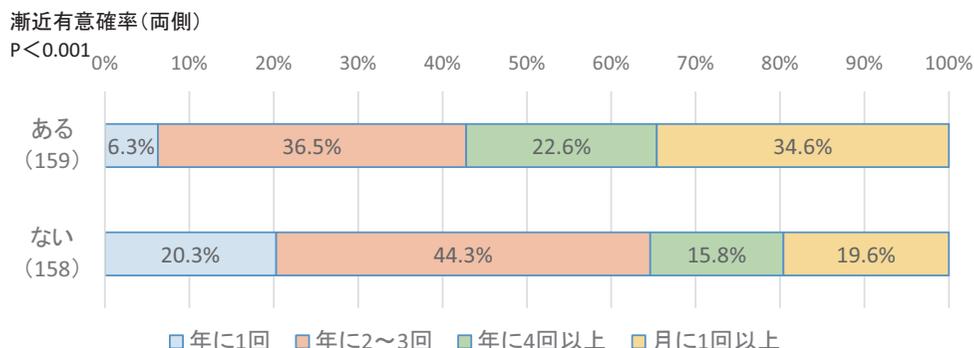


図 17 研修会などの参加経験×今後に参加したい活動の回数

今後に「年に1回」だけ活動に参加したいと考えているものの比率は、研修会などへの参加経験があるもので6.3%なのに対して、ないものでは20.3%と3倍以上の違いがあり、ないもので高い(1%水準で有意)。逆に、「月に1回以上」の頻度で活動に参加したいと考えているものの比率は、研修会などへの参加経験のあるもので34.6%、ないもので19.6%と、1.5倍近くの違いがあり、あるもので高い(1%水準で有意)。

研修会などへの参加経験があるものは、参加経験がないものに比べて、今後のボランティア活動への参加意欲が旺盛で、希望する活動の頻度も高いという傾向が確認される。

1) 研修会などへの参加によって、ボランティア活動への参加意欲が醸成されるといった影響関係を想定することも可能であるが、2) ボランティア活動参加へのモチベーションの高いものほど、研修会などへの参加意欲も旺盛であるといった影響関係も想定可能である。3) 双方向の影響関係がスパイラル的に働いている可能性、4) 他の要素を媒介とした疑似相関である可能性、なども払拭できない。縦断調査などを通して影響関係を把握することを、今後の研究課題としたい。

4) 過去1年間の参加経験および今後の参加の意向との関係

過去1年間の実際の参加経験との結びつきに比べて、今後の参加の意向との結びつきの方が相対的に小さいことも確認される。過去1年間に活動したものが回答者の35.9%であるのに対して、今後に活動に参加してみたいと考えているものは70.3%と、現実と意欲の間にはかなりのギャップがある。今後の参加の意向の有無と過去1年間の参加経験の有無の関係を確かめたものが図18である。

正確有意確率（両側）

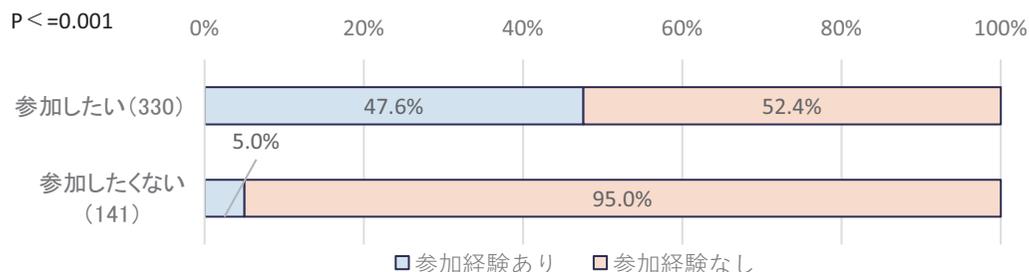


図 18 今後の参加の意向の有無×過去1年間の参加経験の有無

今後、参加したいという意向を持っているもののうち、過去1年間に参加経験のあるものは47.6%と約半数にとどまる。やってみたい気はあるのだけれど、さまざまな理由で実際の行動には踏み出せていないものが少なくないことが示唆される結果となっている。

参加意欲があるものに限定して、研修会などへの参加経験の有無と過去1年間のボランティア活動への参加経験の有無の関係を確認したものが図19である。

正確有意確率（両側）

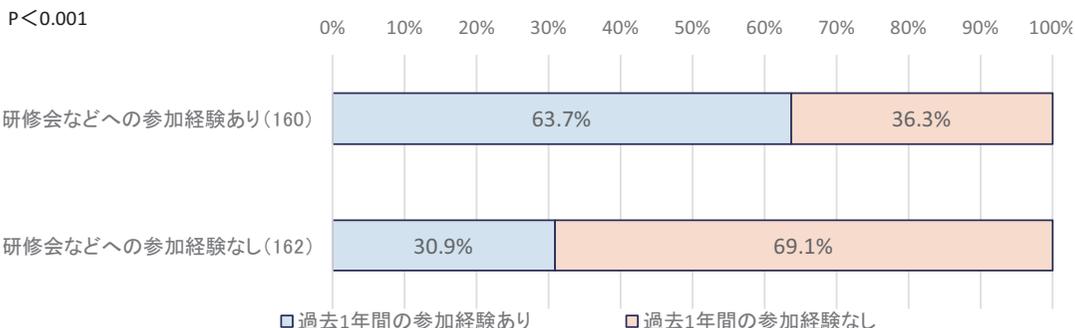


図 19 研修会への参加経験の有無×過去1年間の参加経験の有無（参加の意向ありグループ）

過去1年間にボランティア活動への参加経験があるものの比率は、研修会などへの参加経験があるもので63.7%なのに対して、研修会などへの参加経験がないものでは30.9%と、あるもので高く2倍以上の違いがあり、1%水準で有意差がある。ボランティア活動への参加に向けて一歩を踏み出すうえで、研修会などへの参加経験が後押しになっている可能性が示唆される。

5. 研修会、講演会、催しなどへの参加の経緯とボランティア活動参加の関係

1) 研修会、講演会、催しなどへの参加の経緯

今回の調査では研修会などへの参加経験のあるものに、参加の経緯について、「学校で参加」、「職場で参加」、「地域で参加」、「自発的に参加」、「その他」の選択肢からの複数回答方式（すべて選んで○）で回答を得ている。回答結果をまとめたものが図20、参加の経緯（経路）の種

類について集計したものが図21である。

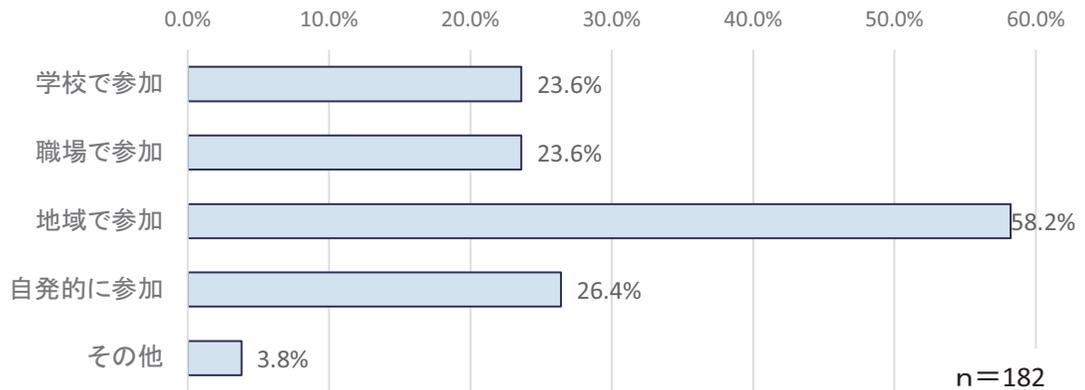


図 20 研修会などへの参加の経緯

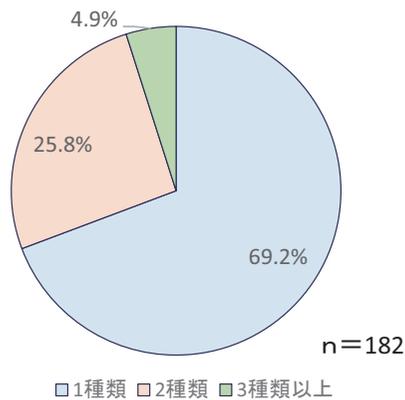


図 21 参加の経緯 (経路) の種類

「学校で参加」、「職場で参加」、「自発的に参加」が、いずれも 2 割程度で大差がないのに対して、「地域で参加」は 58.2% と 5 割を超え、地域での開催を契機として参加したものが突出して多い。参加の経緯 (経路) の種類に関しては、「1 種類」のものが 69.2% と大半を占めるが、「2 種類」のものが 25.8%、「3 種類以上」のものが 4.9% と、複数の機会に参加しているものもある。

「参加の経緯」と性別との関係を確認したものが図 22、年代との関係を確認したものが図 23 である⁵⁾。

ボランティア活動参加と動機の付与2

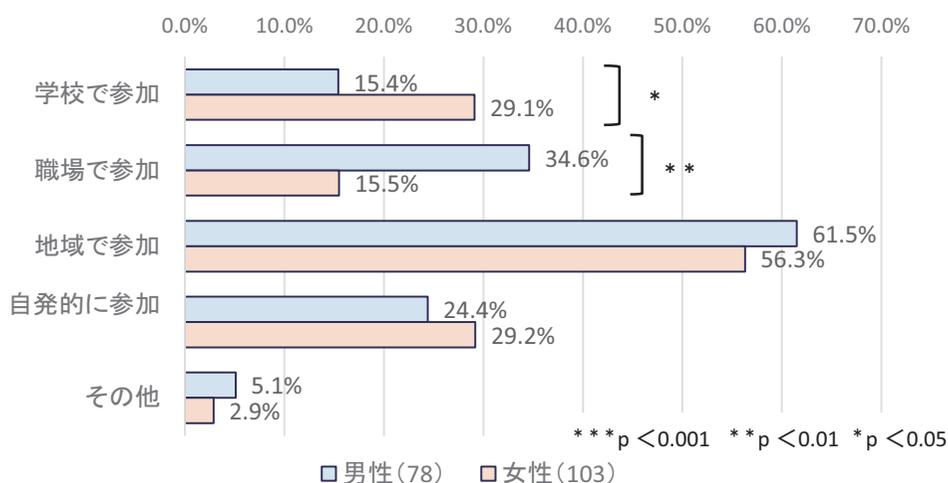


図 22 性別×参加の経緯

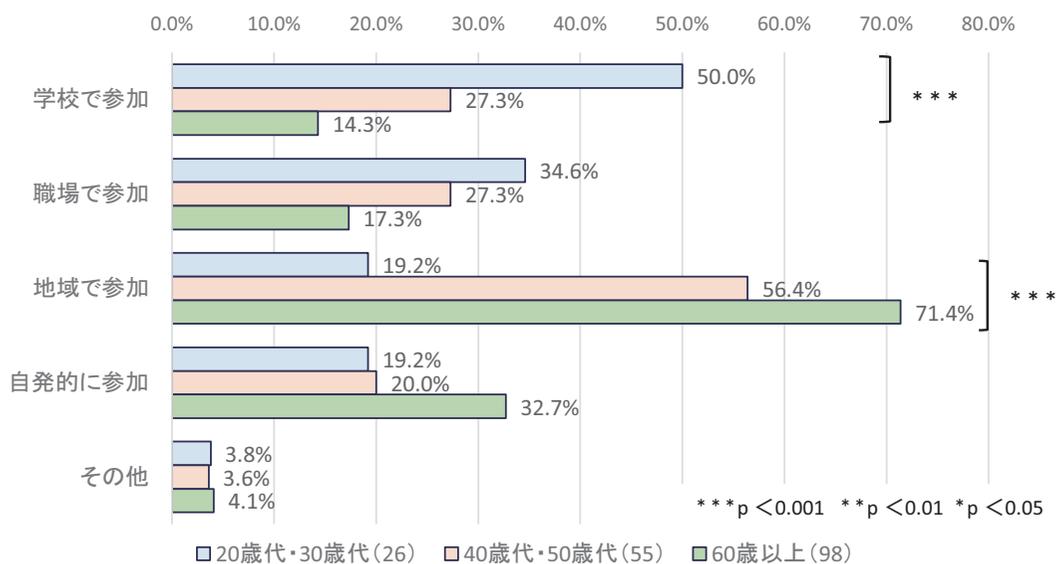


図 23 年代×参加の経緯

性別との関係について、「学校で参加」の比率は女性が5%水準で有意に高く、「職場で参加」の比率は男性が1%水準で高い。福井市では「職場で参加」について男女差がみられなかったが、女性の就業率の違いが反映された結果だと考えることができる。

年代との関係について、「学校で参加」の比率は、「20歳代・30歳代」が1%水準有意に高く、「60歳以上」が1%水準で有意に低い。学校でボランティア活動に関する取り組みがおこなわれるようになった時期に在学していたかどうか反映されていることが推察される。「地

域で参加」の比率は、「20歳代・30歳代」が1%水準で有意に低く、「60歳以上」が1%水準で有意に高い。地域コミュニティとのつながりの濃淡が影響している可能性が高いと思われる。

「参加の経緯（経路）の種類」との関係については、性別や年代による有意な違いはみられない。

2) 参加の経緯とボランティア活動参加の関係

研修会などへの「参加の経緯」と過去1年間の「ボランティア活動への参加経験」の関係を確認したものが図24である⁶⁾。有意な結びつきはみられない。

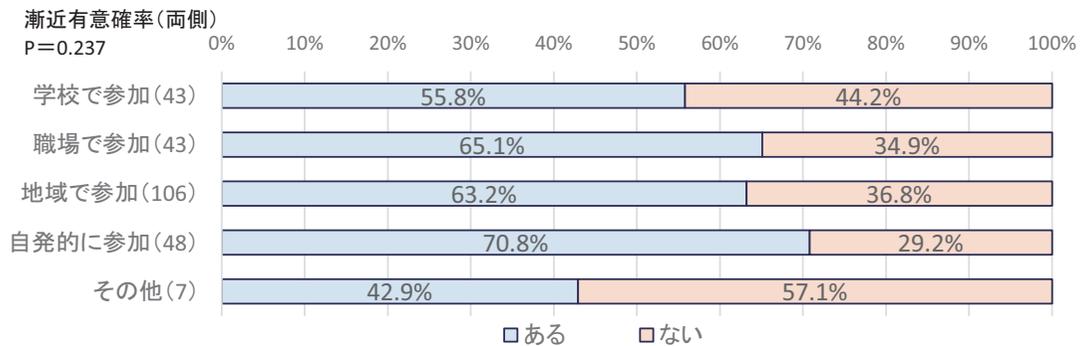


図 24 参加の経緯×過去1年間の参加経験の有無

次に、参加形態（誰と活動したのか）や活動場所（どこで活動したのか）との関係について確認していきたい。

今回のアンケート調査では、過去1年間にボランティア活動をおこなったものに、どのような形態で（誰と）参加したのかを複数回答形式（あてはまるものすべてに○）で尋ねている。それをまとめたものが図25である。

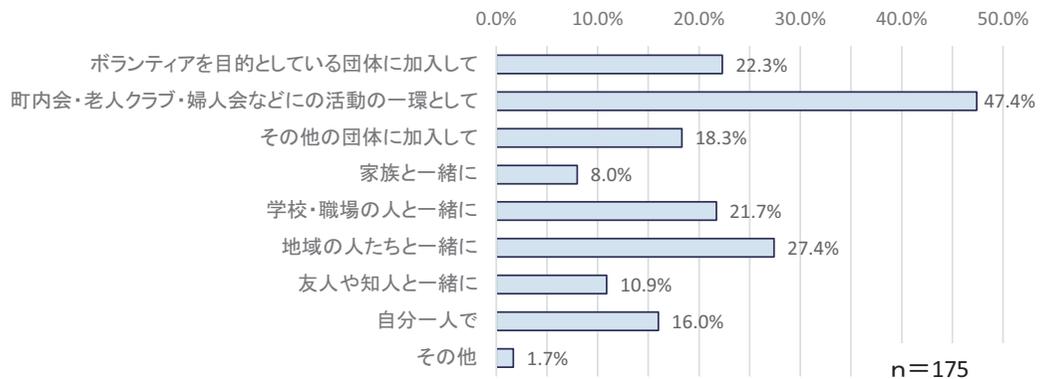


図 25 過去1年間の活動の形態

「町内会・老人クラブ・婦人会などの活動の一環として」参加したものが最も多く47.4%と半数程度にあたる。これに「地域の人たちと一緒に」の27.4%、「ボランティア目的としてい

る団体に加入して」の22.3%、「学校、職場の人と一緒に」の21.7%が続く。その他の形態で参加したものはいずれも20%に満たない。

同様に、活動の場所（どこで）に関しても複数回答形式（あてはまるものすべてに○）で尋ねている。それをまとめたものが図26である。

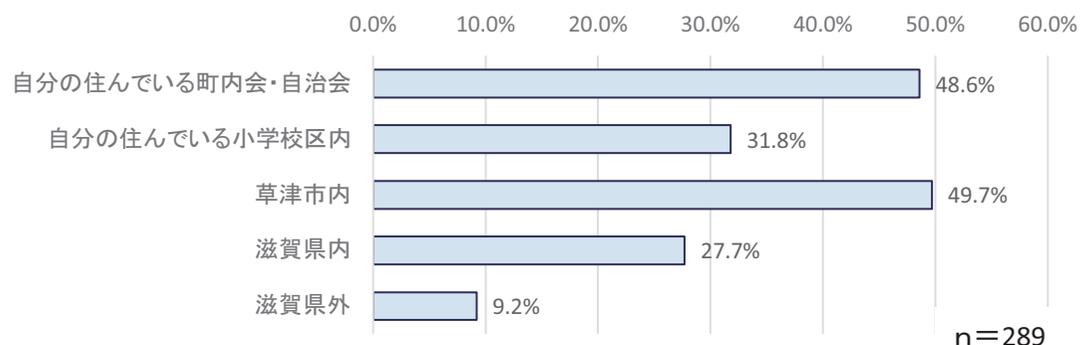


図 26 過去1年間の活動場所

「草津市内」と「自分の住んでいる町内会・自治会」の比率が高く、49.7%と48.6%と2人に1人程度あたる。これに「自分の住んでいる小学校区内」の31.8%、「滋賀県内」の27.7%が続く。「滋賀県外」の割合は低く、9.2%にとどまる。県外での活動に参加しようとする、移動に要する時間的・経済的なコストなどが増大することなどが影響していると考えられる。

福井市の場合は、居住地から遠くなるに従って参加者の比率が逡減するという傾向が顕著であった。草津市の場合も「滋賀県外」の比率は突出して低くなるが、「滋賀県内」の比率は、「自分が住んでいる小学校区内」と大差がない。福井市と草津市の人口移動に関する定住性・流動性の違いや、通勤・通学圏の広さの違いなどが反映されている可能性が考えられる。

研修会などへの「参加の経緯」と「参加の形態」（誰と参加したのか）の関係を確認したものが図27である⁷⁾。

「自発的に参加」と「その他」を除いて、どのような経緯で研修会などに参加したのかに関わらず、「町内会・老人クラブ・婦人会などの活動の一環として」参加したものの比率が最も高く、ボランティア活動参加が地縁的な集団を媒介としておこなわれていることが分かる。一方で、「学校で参加」、「職場で参加」で、他の経緯で参加したものよりも「学校・職場の人と一緒に」活動したものの比率が高い。地縁的な集団の活動の一環としてボランティア活動に参加したものの比率が最も高いのは「地域で参加」で、「地域で参加」は「地域の人たちと一緒に」活動したものの比率も高い。「自発的に参加」したものは、ボランティア活動への興味や関心、参加意欲が高いことが予想されるが、「ボランティアを目的としている団体に加入して」活動したものの比率が、「その他」を除いて、最も高いのはこの経緯で参加したものである。

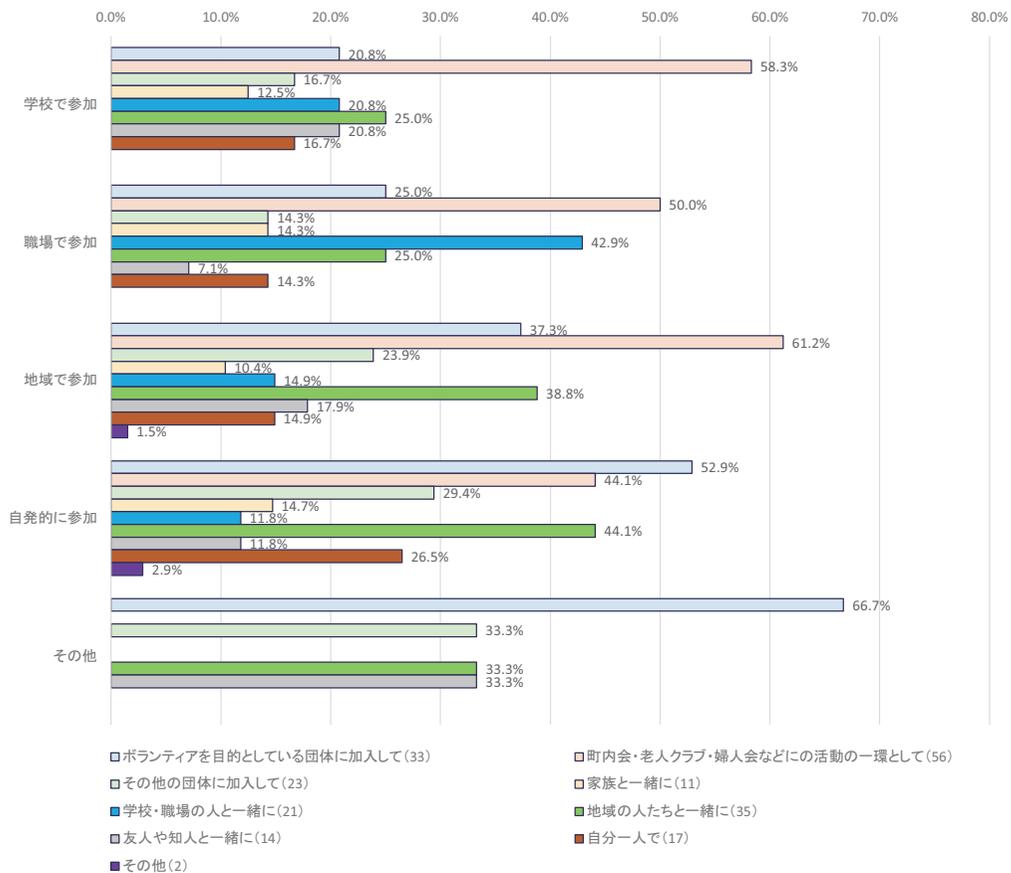


図 27 参加の経緯×参加者の形態 (誰と活動した)

研修会などへの参加の経緯と参加の場所 (どこで活動したのか) の関係を確認したものが図 28 である。

「その他」と「自発的に参加」を除いて、どのような経緯で研修会などに参加したのかに関わらず、「自分の住んでいる町内会・自治会」で活動したものの比率が最も高く、ボランティア活動参加が身近な地域を中心にしておこなわれていることが分かる。一方で、「地域で参加」、「学校で参加」といった参加者間で生活圏の共有が予想される経緯で参加したのものでは、「滋賀県外」といった生活圏から遠い場所でボランティア活動をおこなったものの比率が低くなっている。「滋賀県外」や「滋賀県内」といった生活圏を超える圏域で活動したものの比率は、「自発的に参加」のように興味や関心に基づくことが予想される経緯で参加したものや、「職場で参加」のように生活圏が共有されているとは限らない経緯で参加したもので高くなっている。

研修会などへの「参加の経緯」と「活動形態」(誰と参加したのか) や「活動場所」(どこで活動したのか) の間には、ある程度の関連性が確認される。研修会などへの参加によってモチ

ボランティア活動参加と動機の付与2

バージョンが向上し、そのことが後押しとなって参加が実現しているといった仮説に傍証が与えられていると解釈することもできる。

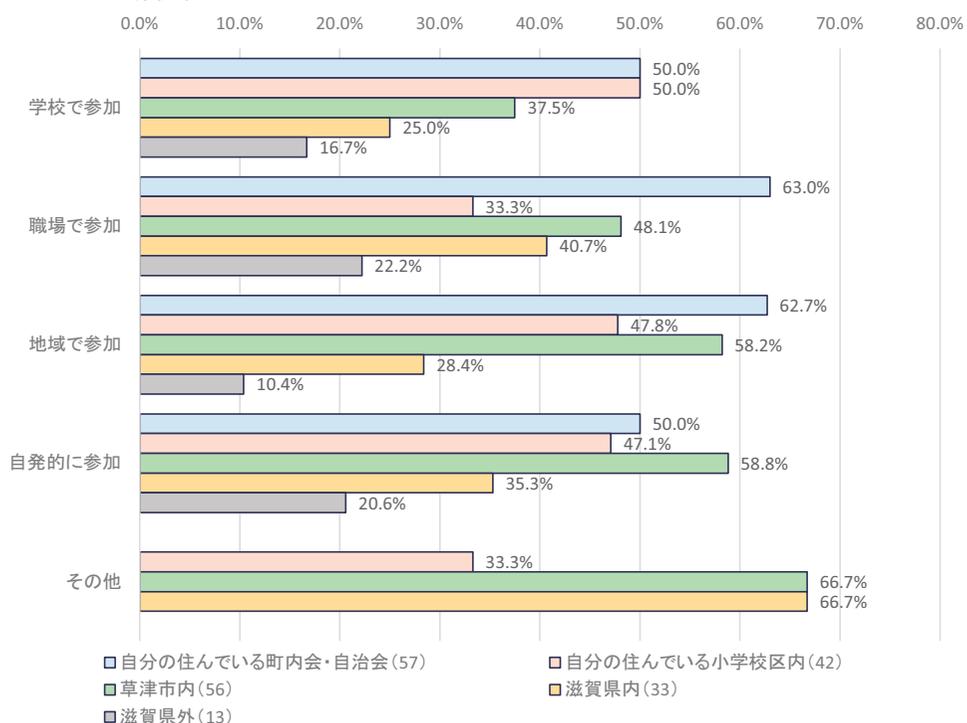


図 28 参加の経緯×活動場所

研修会などへの「参加の経緯」と「今後のボランティア活動への参加の意向」の関係を確認したものが図29である。



図 29 参加の経緯×今後のボランティア活動への参加の意向

有意な結びつきはみられない。図15からは、研修会などへの参加によってボランティア活動

への参加意欲が向上するという可能性が示唆されるが、どのような経緯で参加したのかは影響しないと考えることができる。

続いて、研修会などへの参加の経緯（経路）の種類とボランティア活動参加の関係について確認していきたい。

研修会などへの参加の経緯（経路）の種類と過去1年間のボランティア活動への参加経験の有無の関係を確認したものが図30である。

正確有意確率(両側)

P=0.005

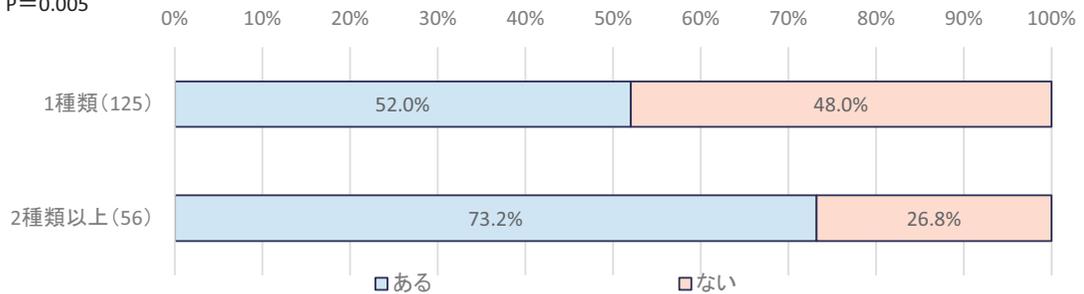


図 30 参加の経緯（経路）の種類×過去 1 年間の参加経験の有無

過去 1 年間にボランティア参加の参加経験があるものの比率は、「1 種類」の経緯（経路）で研修会に参加したもので52.0%なのに対して、「2 種類以上」の経緯（経路）で参加したものでは73.2%で、1.5倍近くの違いがあり、「2 種類以上」のものが 1 %水準で有意に高い。

参加したボランティアの「活動の種類」との関係を確認したものが図31である。

漸近有意確率(両側)

P=0.338

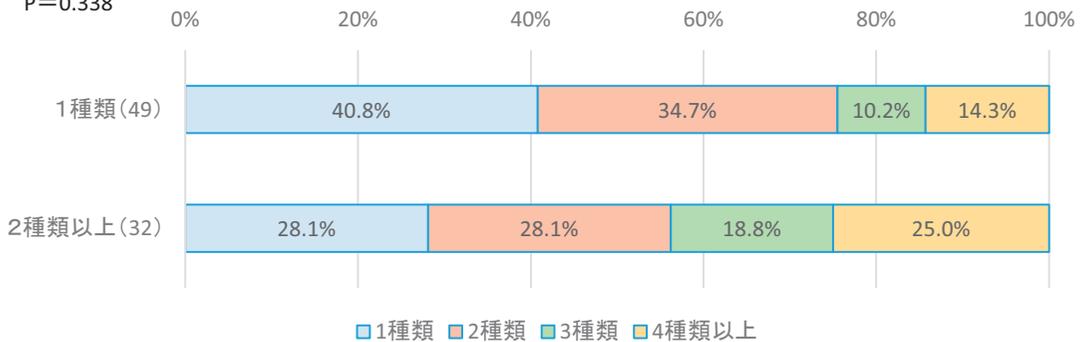


図 31 参加の経緯（経路）の種類×過去 1 年間の参加活動の種類

ケース数が少ないこともあり、統計的に有意な結びつきは確認できないが、グラフの形状からは、「2 種類以上」の経緯（経路）で研修会に参加したもののほうが、「1 種類」のものよりも、過去 1 年間に参加したボランティア活動の種類が多いという傾向がうかがえる。

過去1年間のボランティア活動への「参加の回数」との関係を確認したものが図32である。

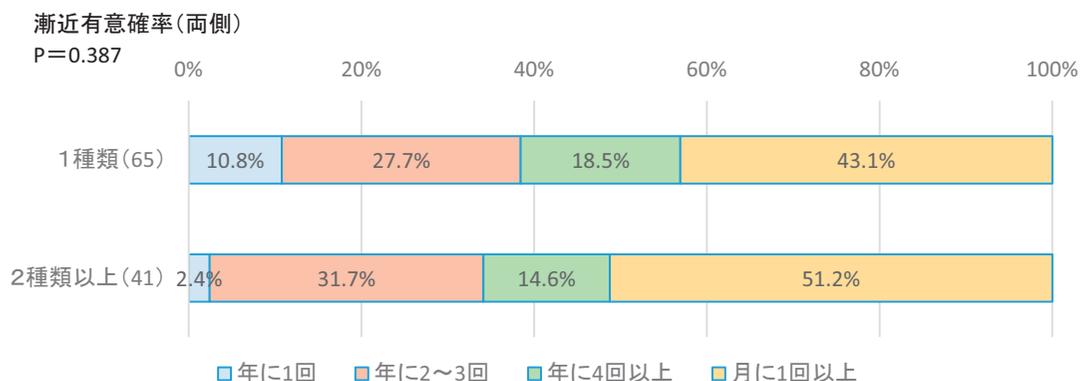


図 32 参加の経緯 (経路) の種類×過去1年間の活動参加の回数

ケース数が少ないこともあり、統計的に有意な結びつきは確認できないが、グラフの形状からは、「2種類以上」の経緯 (経路) で研修会に参加したもののほうが、「1種類」のものよりも、過去1年間に参加したボランティア活動の回数が多いという傾向がうかがえる。

「参加の経緯 (経路) の種類」の多寡が、ボランティア活動参加に影響する可能性があることが推察されるが、今回のデータからはケース数の関係で統計学的に有意な結びつきが確認できた分析は1つにとどまった。今後の課題としたい。

「今後の活動参加の意向」と関係を確認めたものが図33である。

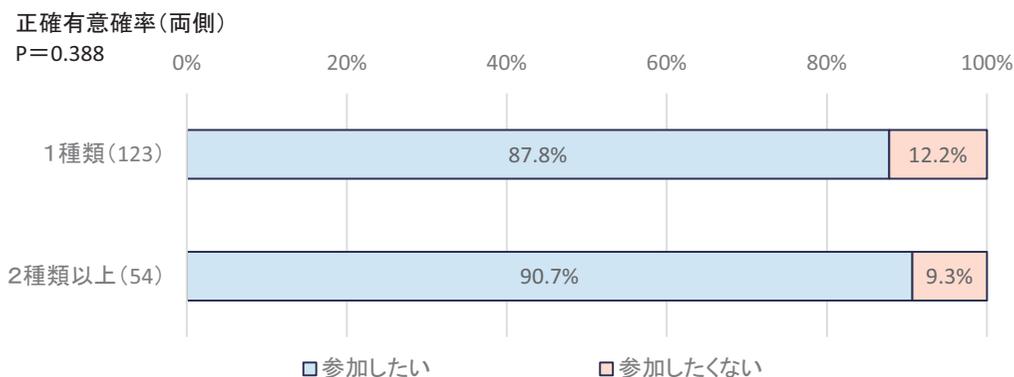


図 33 参加の経緯 (経路) の種類×今後の活動参加の意向

有意な結びつきは確認できない。同様に、今後に参加を希望する「活動の種類」や「回数」との間にも有意な結びつきは確認できない。

「研修会などへの参加経験」とボランティア活動参加の関係性の分析からは、「今後の活動参加への意向」よりも、「過去1年間の参加経験」との結びつきが大きいことが示唆されたが、研修会などへの「参加の経緯」や「参加の経緯 (経路) の種類」との関連性についても同様の傾

向が認められる。

1) どのような経緯であれ、研修会などへの参加は、ボランティア活動参加への全般的なモチベーションを高める効果を持つが、2) ボランティア活動への参加が望ましいという通念も広く共有されているため、3) 実現されるかどうかは未定の今後の参加に関する意向（低いハードル）との結びつきに比べて、4) さまざまな阻害要因がクリアされて初めて実現される参加経験（高いハードル）との結びつきの方が、より明瞭な形で確認されやすい、といった機制が働いていることが推察される。

6. ボランティア活動への対価とボランティア活動参加の関係

以下では、ボランティア活動への対価の支払いによるインセンティブの付与が、ボランティア活動参加に与える影響について検討していく。

1) ボランティア活動への対価の支払いへの評価

今回のアンケート調査では、ボランティア活動への参加に対して対価を提供することへの賛否を尋ねている。結果をまとめたものが図34、賛成と回答したものが適切だと考える対価の範囲についてまとめたものが図35である。

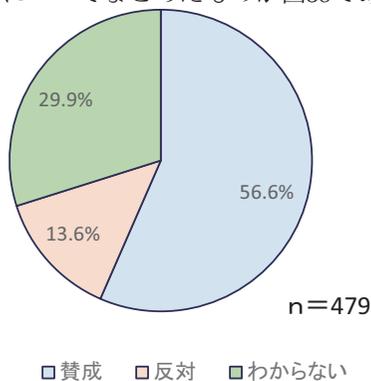


図 34 対価を支払うことへの賛否

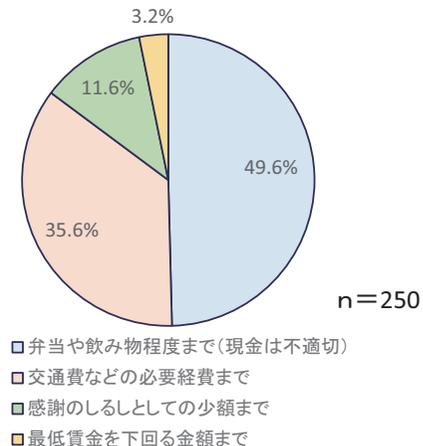


図 35 適切だと考える対価の範囲

「対価を支払うことへの賛否」に関しては、「賛成」のものが最も多く56.6%と半数を超える。「反対」のものは13.6%にとどまり、4倍以上の違いがある。「わからない」（判断保留）のものも29.9%いる。

「適切だと考える対価の範囲」に関しては、「弁当や飲み物程度まで（現金は不適正）」と回答したものが49.6%で最も多く、これに「交通費などの必要経費まで」の35.6%が続く。「感謝のしるしとしての少額まで」、「最低賃金を下回る金額まで」といった回答は11.6%、3.2%と少

数にとどまる。ボランティア活動への対価の支払いを肯定的にとらえているものであっても、弁当や飲み物の提供、必要経費の支払い程度が妥当だと考えているものが大多数を占める。ボランティア活動のミニマムの構成要素としては、「公共性」、「自発性」、「非営利性」があげられることが多く、「非営利性」に関して広く共通認識になっていることがうかがえる。

今回のアンケート調査では、対価が支払われることで、ボランティア活動への参加意欲が高まるかどうかを尋ねている。結果をまとめたものが図36である。「高まる」が9.7%、「どちらかといえば高まる」が35.2%で、あわせると4割以上に達する。「かわらない」と回答したものが48.8%で、最も多い。「どちらかといえば低まる」、「低まる」といった回答もみられるが、あわせても1割以下で少数派にとどまる。

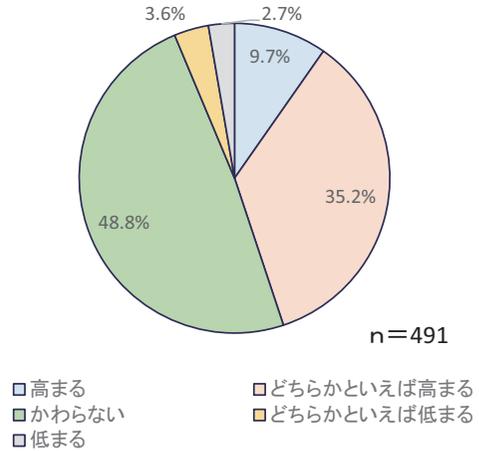


図36 対価による参加意欲の変化

「対価を支払うことへの賛否」と対価の支払いによる「参加意欲の変化」の関係を確かめたものが図37である。

漸近有意確率(両側)

P<0.001

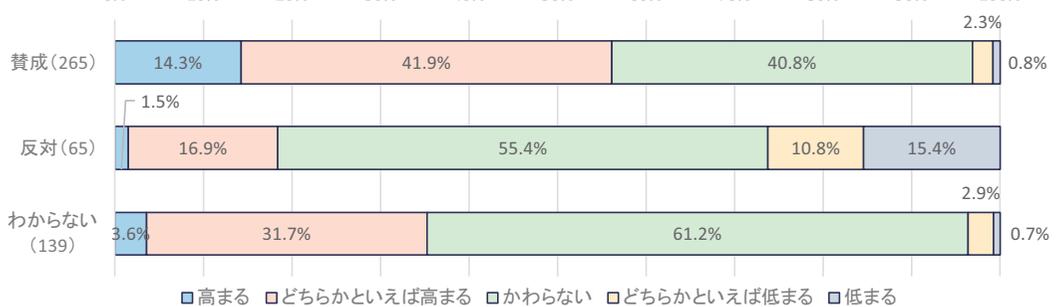


図37 対価を支払うことへの賛否×対価による参加意欲の変化

「賛成」では、「高まる」、「どちらかといえば高まる」の比率が1%水準で有意に高く、「かわらない」、「低まる」の比率が1%水準で有意に低い。「反対」では、「高まる」、「どちらかといえば高まる」の比率がそれぞれ5%水準、1%水準で有意に低く、「どちらかといえば低まる」、「低まる」の比率が1%水準で高い。「わからない」と回答した判断保留のものでは、「高まる」の比率が1%水準で有意に低く、「かわらない」の比率が1%水準で有意に高い。

当然の結果かもしれないが、対価の支払いによって参加意欲が向上するものは「賛成」のものに多く、低下するものは「反対」のものに多い。「わからない」と回答したものでは、「高まる」といった極端な選択肢を選ぶものが少なく、「かわらない」という中立的な選択肢を選ぶ

ものが多い。

「適切だと考える対価の範囲」と「対価の支払いによる参加意欲の変化」の関係を確かめたものが図38である⁸⁾。「交通費などの必要経費まで」で、「高まる」の比率が1%水準で有意に低く、「感謝のしるしとしての少額まで」と「最低賃金を下回る金額まで」で、「高まる」の割合が5%水準で有意に高い。

よりハイレベルの対価を適切だと考えるものほど、対価の支払いが参加意欲の向上につながると感じているという傾向が確認できる。一方で、図35で確認した通りハイレベルの対価を適切であると考えられるものは少数派にとどまるため、対価の支払いによるボランティア活動の活性化の効果は限定的なものであることも予想される。

漸近有意確率(両側)

P=0.007

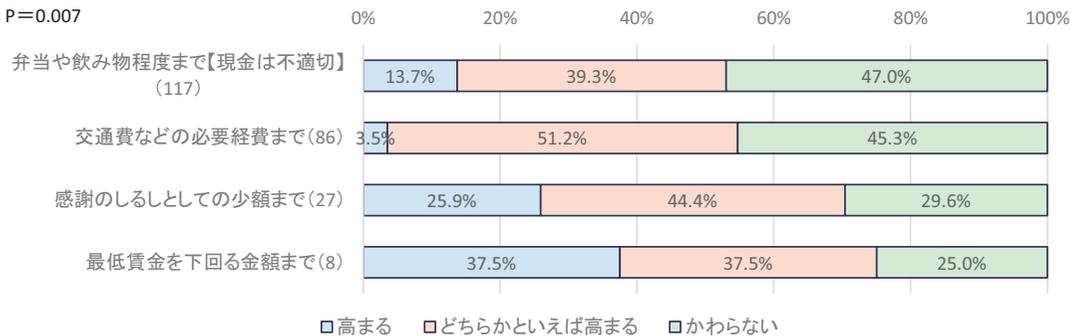


図 38 適切だと考える対価の範囲×参加意欲の変化

2) ボランティア活動への対価の評価と参加経験の関係性

「対価の支払いへの賛否」と「過去1年間のボランティア活動経験の有無」の関係を確かめたものが図39である。

漸近有意確率(両側)

P<0.001

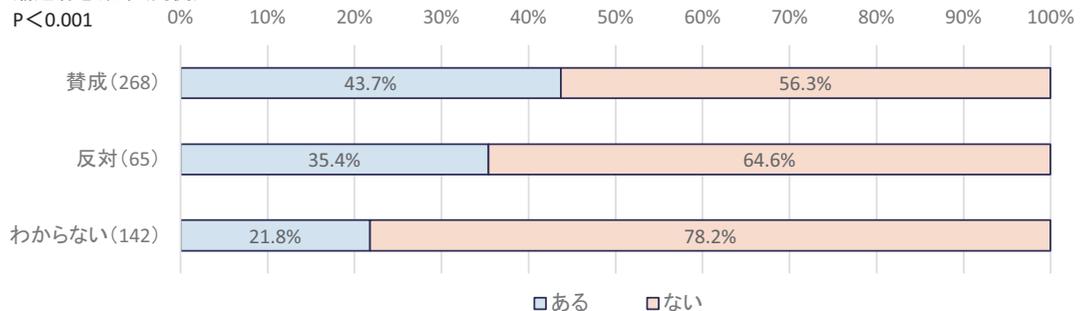


図 39 対価の支払いへの賛否×過去1年間のボランティア活動経験の有無

「賛成」のもので、参加経験を有するものの比率が1%水準で有意に高く、「わからない」も

ので、1%水準で有意に低い。対価の支払に関して賛否の判断を保留したものは、「賛成」あるいは「反対」といった明確な判断を下したものに比べて、ボランティア活動への興味・関心が相対的に薄いことが予想され、そのことが行動者率の低さに影響している可能性が推察される。

「対価の支払いへの賛否」について、「参加した活動の種類」、「参加した回数」との関係を確認したものが図40、図41である。

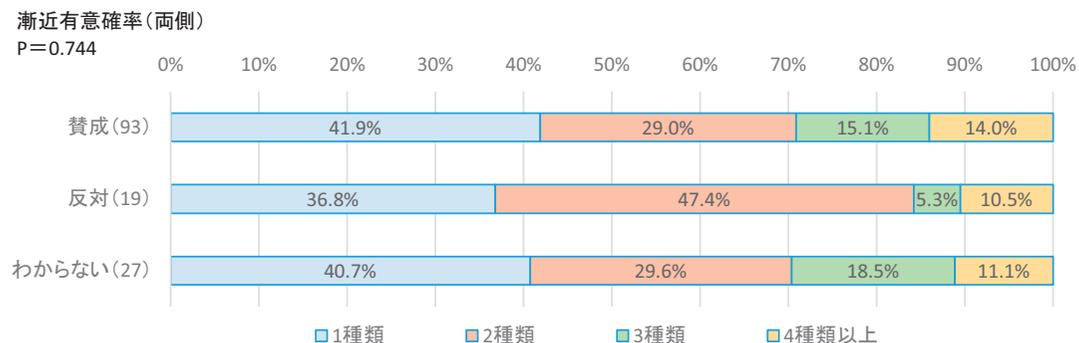


図 40 対価の支払いへの賛否×過去1年間の活動の種類

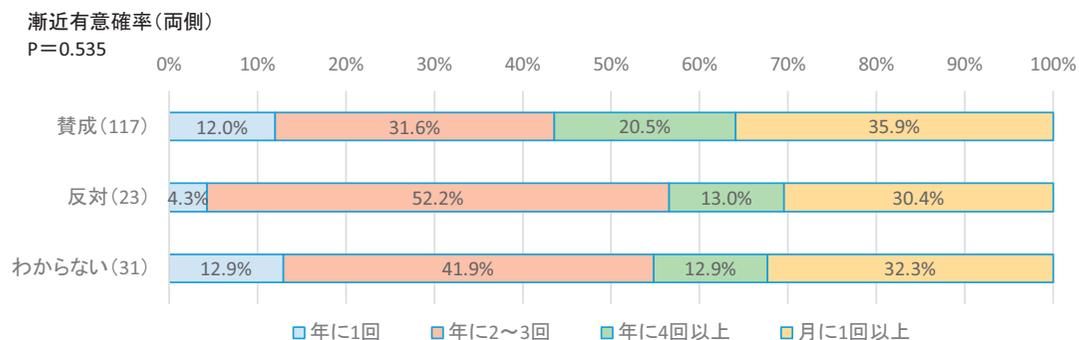


図 41 対価の支払いへの賛否×過去1年間の活動の回数

いずれも有意な結びつきは確認されない。対価が支払われるという条件の下での比較ではないため、あくまで傍証的な分析に過ぎないが、ボランティア活動の現状において、対価への賛否は、参加する活動の種類、回数に影響を与えてはいない。現状でも、弁当や飲み物が支給される活動、交通費やボランティア保険の加入費用などが補填される活動は存在するが、対価の支払いを評価するものがそうした活動を選んで積極的に参加しているわけではなさそうだ。

「適切だと考える対価の範囲」と「過去1年間のボランティア活動経験」の有無の関係を確かめたものが図42である。有意な結びつきは確認されない。ボランティア活動の種類、回数の間にも有意な結びつきは確認されない。



図 42 適切だと考える対価の範囲×過去 1 年間の参加経験

「対価の支払いによる参加意欲の変化」と「過去 1 年間のボランティア活動経験の有無」の関係を確かめたものが図 43 である。有意な結びつきは確認されない。ボランティア活動の種類、回数の間にも有意な結びつきは確認されない。

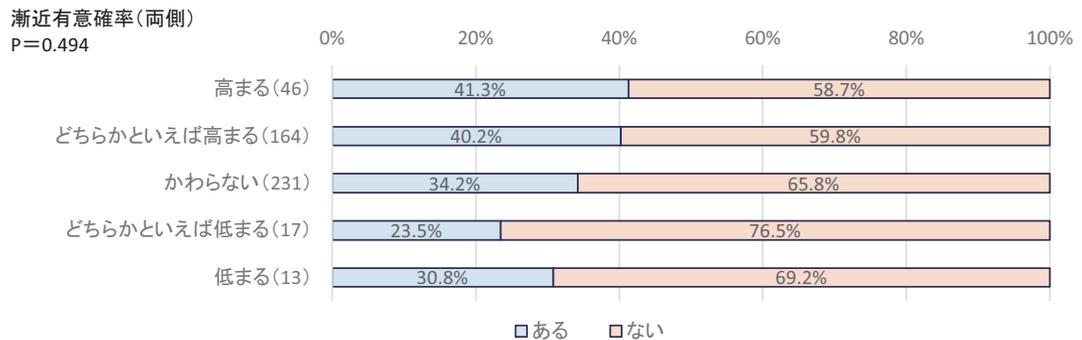


図 43 対価の支払いによる参加意欲の変化×過去 1 年間の参加経験

対価が支払われるという条件の下での比較ではないため、やはり傍証的な分析に過ぎないが、対価の支払いによるボランティア活動の活性化の効果は限定的であることが推察される。

7. まとめ

ボランティア活動の活性化のための施策や取り組みの効果について、1) ボランティア活動に関する研修会などを開催し、具体的な活動の内容や方法、やりがいや楽しさ、社会的な意義などを紹介し、意識啓発を通して、参加意欲の向上を目指す内側からの動機付けに照準したモチベーション・アプローチ(内側からの動機付け)と、2) 活動への参加になんらかの対価を付与するといった形で、外的な誘因によって参加を引きだそうとするインセンティブ・アプローチ(外側からの動機付け)、に大別して検討した。

モチベーション・アプローチ(内側からの動機付け)に関しては、因果関係の検証という意味で課題が残るが、1) ボランティア活動に関する研修会などの開催、2) 研修会などへの参

加、3) 参加意欲の向上、参加の仕方や活動の方法に関する知識やノウハウの習得、4) ボランティア活動への参加、といった経路で、活性化につながっている可能性が示唆された。

インセンティブ・アプローチ（外からの動機付け）に関しては、よりハイレベルの対価を適切だと考えるものほど、対価の支払いが参加意欲の向上につながると感じているという傾向が確認されたが、ハイレベルの対価を適切であると考えられるものは1割程度と少数派にとどまる。ハイレベルの対価を支払ったとしても、ボランティア活動の活性化に与える効果は限定的なものにとどまることが予想される。

草津市のデータの分析結果と福井市のデータの分析結果は、多少の違いはあるものの大枠ではほとんど一致している。モチベーション・アプローチ（内側からの動機付け）、インセンティブ・アプローチ（外からの動機付け）の効果は、人口移動に関する定住性、流動性にほとんど影響されないことが推察される⁹⁾。

本稿では動機づけとボランティア活動参加の関係に照準した分析をおこなったため、ボランティア活動参加に影響することが予想される他の要因との総合的な関連性の中でのモチベーション・アプローチ、インセンティブ・アプローチの働きや効果については検討できていない。今後の研究課題としたい。

謝辞

本稿で使用したアンケート調査の実施、データの収集、分析にあたり、科学研究費助成事業の基盤研究（C）（一般）の助成を受けた（課題番号：17K04214）。本研究は福井市総合ボランティアセンターとの共同研究として実施されたものである。仮説の設定、調査票の設計の段階からアイデアを出し合って調査・研究プロジェクトを進めてきた。サンプリングの実施にあたっては多大なご尽力をいただいた。サンプリングの実施にあたっては福井市、草津市の関係部署にご協力をいただいた。本稿で使用したデータが収集できたのは、福井市、草津市の一般住民の皆さまのご協力があったからである。ここに記して感謝の意を表したい。

注

- 1) 住民基本台帳を抽出台帳として系統抽出法で実施した。
- 2) ボランティア活動に関する調査・研究では、ボランティア活動の定義が問題になる。今回の調査では、ボランティア活動に関して、一般的に指摘されるミニマムの構成要素としての「公共性」、「自発性」、「非営利性」を前提した定義を採用した。調査票の冒頭部分において、「ボランティア活動」とは、自分の本来の仕事（家事や育児、介護、学業などを含む）とは別に、他人や社会のために、自分の時間や労力を、自発的に（なんらかの強制によるのではなく）、営利を目的とすることなく、提供する活動のことを指します」と定義を明示したうえで、回答を求めている。

- 3) 福井市と草津市の人口に合わせて調査対象者数を決定した。このため分析に使用できるデータ数も草津市は福井市の半分程度となっている。データの統計的な分析に際して、推測統計のレベル（有意差の検定）でデータ数の違いが影響してくることが予想される。福井市、草津市のデータを単独で用いた分析の結果を比較するには、厳密にはデータ数の調整が必要になる。本稿では草津市としてのデータの分析に重点を置くため、基本的にそうした調整はおこなわない。
- 4) カイ2乗検定の結果（漸近有意確率、正確有意確率）については図中に示し、どの部分に有意な差がみられたかについては、残差分析の結果に基づいて本文中に記載する。基本的に以下同様であり、それ以外の場合には注で個別に説明をおこなう。
- 5) 有意差に関する記述は、性別との関係については正確有意確率（両側）、年代との関係については漸近有意確率（両側）、に基づいている。
- 6) 「参加の経緯」に関して、複数回答式（あてはまる番号をすべて選んで○）による回答であるため残差分析はおこなっていない。
- 7) 「参加の経緯」、「参加の形態」ともに、複数回答式（あてはまる番号をすべて選んで○）による回答であるため有意差の検定はおこなっていない。
- 8) 「対価の支払いによる参加意欲の変化」に関して、「どちらかといえば低まる」、「低まる」といった回答が少なく、データ数の関係から、そうした項目を含めて分析を進めると、期待度数が5未満のセルの割合が高くなり、有意差の検定を適切に実施できなくなる。そのため上記の項目を除いた形で分析をおこなっている。
- 9) 『福井県立大学論集』第60号には、塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子（2023a）「ボランティア活動参加と動機の付与1－福井市で実施したアンケート調査のデータ分析から4－」が掲載されている。分析結果の異同の詳細に関しては、上記の論文の参照と本稿との比較をお願いしたい。

参考文献

- 福井県立大学ボランティア研究会【塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・小林明子】（2014）『アクティブシニアのボランティア活動参加に関する研究』福井県立大学地域貢献研究・平成24～25年度調査研究報告書
- 舟木紳介・塚本利幸・橋本直子・永井裕子（2017）「アクティブシニアのICT利用とボランティア活動－福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から3－」『福井県立大学論集』49:1-14
- 舟木紳介・塚本利幸・橋本直子・永井裕子（2023）「高齢者のインターネット利用とボランティア活動－福井市で実施したアンケート調査のデータ分析から4－」『福井県立大学論集』59:1-14
- 桜井政成（2002）「複数動機アプローチによるボランティア参加動機構造の分析－京都市域のボランティアを対象とした調査より－」『ノンプロフィット・レビュー』（日本NPO学会）2-2：111-122
- 桜井政成（2005）「ライフサイクルからみたボランティア活動継続要因の差異」『ノンプロフィット・レ

- ビュー』(日本NPO学会) 5-2: 103-113
- 総務省統計局 (2011)「平成23年社会生活基本調査－生活行動に関する結果－ 結果の概要」<https://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/pdf/gaiyou.pdf>
- 総務省統計局 (2016)「平成28年社会生活基本調査－生活行動に関する結果－ 結果の概要」<https://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/pdf/gaiyou.pdf>
- 塚本利幸 (2011)「福井県における社会活動参加の現状と課題」『ふくい地域経済研究』13: 43-60
- 塚本利幸 (2012)「ボランティア活動参加とジェンダー」『日本ジェンダー研究』15: 65-79
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子 (2016a)「アクティブシニアのボランティア活動参加と基本属性－福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から1－」『福井県立大学論集』47:19-43
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子 (2016b)「アクティブシニアのボランティア活動の参加の様態－福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から2－」『福井県立大学論集』47:45-73
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子 (2017)「アクティブシニアのボランティア活動参加と社会関係資本－福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から4－」『福井県立大学論集』49:15-44
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子 (2018)「アクティブシニアのボランティア活動参加と社会問題への関心－福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から5－」『福井県立大学論集』50:27-58
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子 (2019)「アクティブシニアのボランティア活動参加と構造的制約条件－福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から6－」『福井県立大学論集』52:59-87
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子 (2020)「アクティブシニアのボランティア活動参加の規定要因の総合的分析－福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から7－」『福井県立大学論集』54: 17-43
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子 (2021a)「ボランティア活動参加と基本属性1－福井市で実施したアンケート調査のデータ分析から1－」『福井県立大学論集』56: 33-61
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子 (2021b)「ボランティア活動参加と基本属性2－草津市で実施したアンケート調査のデータ分析から1－」『福井県立大学論集』56: 63-93
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子 (2022a)「ボランティア活動参加の様態の検討2－福井市で実施したアンケート調査のデータ分析から2－」『福井県立大学論集』58: 53-83
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子 (2022b)「ボランティア活動参加の様態の検討2－草津市で実施したアンケート調査のデータ分析から2－」『福井県立大学論集』58: 85-115
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子 (2023a)「ボランティア活動参加と動機の付与1－福井市で実施したアンケート調査のデータ分析から4－」『福井県立大学論集』60: 47-74
- 塚本利幸・小林明子・酒井美和 (2013)「混住化地域の近隣関係における互酬性－福井市の事例から－」『福井県立大学論集』41: 13-38
- 塚本利幸・霜浦森平・山添史郎・野田浩資 (2002)「環境ボランティア活動への参加と生活経験」『福井県立大学論集』21: 39-55
- 塚本利幸・霜浦森平・山添史郎・野田浩資 (2004)「環境ボランティア活動の多様性と参加の規程要因－参加意欲と参加経験のギャップをめぐって－」『福井県立大学論集』23: 73-90
- 塚本利幸・霜浦森平・山添史郎・野田浩資 (2012)「ボランティア活動参加と地域活動参加, 近隣交際の関連についての考察－福井市の事例から－」『ふくい地域経済研究』15: 15-36
- 山添史郎・霜浦森平・塚本利幸・野田浩資 (2012a)「地域環境保全活動への参加と社会関係資本－滋賀県守山市のNPO法人「びわこ豊稷の郷」を事例にして－」『環境社会学研究』18: 155-166
- 山添史郎・霜浦森平・塚本利幸・野田浩資 (2012b)「地域環境NPOの会員の年齢層と参加の様態－滋賀県守山市のNPO法人「びわこ豊稷の郷」を事例として」『京都府立大学学術報告(公共政策)』4: 73-88

- 山添史郎・霜浦森平・塚本利幸・野田浩資（2015）「地域環境 NPO 会員の社会関係資本と参加の様態－NPO 法人「びわこ豊穰の郷」の会員構成の変化をめぐって」『水資源・環境研究』28-2：149-158
- 山添史郎・塚本利幸・霜浦森平・野田浩資（2017）「地域環境 NPO の展開プロセスと参加層の変化－NPO 法人「びわこ豊穰の郷」の会員アンケート調査の 3 時点比較－」『水資源・環境研究』30-2：66-72
- 山添史郎・塚本利幸・霜浦森平・野田浩資（2017）「地域環境 NPO における社会運動性と事業性－NPO 法人「びわこ豊穰の郷」の展開プロセスと会員の参加の様態をめぐって－」『京都府立大学学術報告. 公共政策』9：39-58